

寒 茜

丸山佳子



来
る
年
の
戌
の
耳
に
も
情
報
過
多

学
ぶ
こ
と
ま
だ
あ
り
桐
の
実
を
仰
ぐ

B
館
に
八
方
美
人
の
花
八
つ
手

踏
み
ご
た
へ
あ
る
落
葉
ふ
み
猿
田
彦
社



お思召しほどのこぼれ陽杉落葉
山眠り視界が広くなりました
白壁に和んでゐたる柿一個も
氏素性水にもあるや春は遅々
大吉も小吉もあり寒芽吹く
寒茜ながめ尽くして髪白し



豊 田 都 峰

清響集 その五十八

賀 状

狛 犬 の 杜 へ ま つ す ぐ 恵 方 道

×

冬 の 水 あ ざ む か れ ゐ る 一 樹 相

枯 木 立 し ば し 捧 ぐ る 星 赤 し

夜 の 霰 白 骨 め い て ゆ く 林

鮒 起 し 腹 ぞ こ よ り の 本 気 な る



枇杷の花また路地折れに人を訪ふ
しばらくは雑木紅葉のひなた窪
冬の雨ひと日林を離れざる
枯芒雲にも去られ暮れにけり
山眠るつらなることをよしとして
磯千鳥いちばんとほきものは沖
冬木径すき間だらけの影つれて
冬日影すこしこぼして鳥の二羽

秀華採集

秋の七草指折る途中夫が出る

田村 みどり

長年の染み付いた潜在意識がふと出てくる。それを具体的に表出する。そしてなんの銜もない。そこに作者が滲むということになる。俳句に通じていての作品と評価する。

経糸を抜けば木の実の降りやまず

井上 菜摘子

修道女降りて来さうな落葉径

城石 美津子

前句はたて糸を抜くという発想のよさ。後句は黄色い落葉径であろうが、それに基づく連想のよさを、それぞれ認めたい。俳句には思いつきな面が多分にある。

鈴鹿 仁

家宝壺

石投げて孤独の残る冬川原
風凍つるふりむきざまに死語ふやす
数へ日の川より嬉戯の羽音して
純白の命毛染まる筆はじめ
年迎ふ吉の位置ぎめ家宝壺
若水の十指に溢れ風となる
健かに生き雑煮餅膨らます

近 詠

宇都宮滴水

望郷

冬空のどこを指しても一人ぼつち
熱爛の気負ひのうらにある望郷
旬日の羽子板しまふ姉いもと
古笈の目にも来てゐる初日光ゲ
宝船或る日月の重かりし
尉と姥小さき音にもある淑気
大旦照らふ柱の幾星霜

神麓集



角 直指

秋のぼら赤よりも白いさぎよし
一病とつきあつて生く寒露の日
芋の露こぼれて過去は忘るべし
秋惜しむ捨つべきものを捨てきれず
後悔を引きずつて生く暮秋の雨

伯耆路 彌寝 瓶史

びん乏柿一番高い裾野村
小銭拾ひ冬蝶の死を知らさるる
初雪や阿伝きつねが台座締む
新雪の護摩堂苑の伽羅仄と
雪女生まる日屋台の爛微温し

丹生をだまき

秋蝶と共に吹かるる風の原
秋風に流されて行く蝶は点
写経する背をコスモスの風が撫づ
四方の山島々となる霧の海
ゆりかもめの乱舞をよそに鷺沈思

山田をがたま

露けしや大病三つ乗り越えたり
思ひきや入院指示来夜寒かな
病室に一人の夜長はじまれり
天高し病との距離延ばさばや
秋深し母の享年まで生きねば

船越 美喜

新豆腐些細なことに角立てず
芒原前後忘るるにはあらず
追ひかけてゆくものばかり秋の風
はやばやとあたりが暮れし草の露
魯田に雀遊ばせ他人事

紅葉 柴田 朱美

紅葉から紅葉へ飛んでみたくなる
駅といふ淋しきものに冬紅葉
隙のない女の横顔 蔦 紅葉
石仏に憑かれ紅葉の散り急ぐ
さまざまな紅葉に酔ひし石の貌

神麓集



冬めく

荻野 千枝

有明の鏡するどし神の留守
やさしさを欲るに敗荷水を刺す
無衣の樹々芽を固く抱く冬構
灯の下の茶を熱うして冬めきし
ジデオならあの日の紅葉巻き戻せ

高木 智

枇杷の花法事に集ふ人も減り
笠間圭子さんを偲ぶ一句
初雪や赤い靴履く人恋し
冠雪の遠嶺まばゆし肥後なまり
暗雲の霽れゆき麦の芽が青し
チヨコレート噛り紅葉を遠目にす

服部 郁史

お茶漬やひとりを楽しむ萩の風
白萩や寡黙な人の坐る場所
京菜漬律儀に町に住んでゐる
月に酌む正方形にはなれぬ人
嘘入れてカバンが重し曼珠沙華

松本 鷹根

曇天を黙に徹して鴨群れる
日当りに枯色を得て遠嶺あり
尋ね人ありて蓮田は枯れ早む
黄葉ひらり森の奥へと陽を誘ふ
光悦の枯れを誘ひの垣ながれ

森津 三郎

秋高し親子三人同じ柄
病院の屋上庭園秋高し
朝刊の全面広告秋深し
盛衰の麦稈細工に秋思あり
ぎんなんを拾ふ手もなく海に活く

絆 丸井 巴水

楽しみを探しに案山子担がるる
見つからぬままの遊びへ柿剥かる
画仙紙の白さは水子星流る
新藁の香や一本のきづな橋
鶏頭の赤極まれり伏見鳥羽



京鹿子集

豊田都峰選

秋の七草指折る途中夫が出る
さねさし相模彩さだまりし思ひ羽
暝れば秋にぎやかに黄泉の国
月そぞろ猫もわたしも跳にて
ゆく秋の墓の写真がこつんと着く
稲田一枚たふれ合鍵見つからぬ
りんご園妙に浮き立つ人の鼻
岳樺しらかんば逆落しに秋
秋明菊素描のままをそよぎけり
経糸を抜けば木の実の降りやまず
読み返す青春の詩書秋のぼら

東京 田村みどり

亀岡 井上菜摘子

東京 城石美津子

修道女降りて来さうな落葉径
秋深む触れたる幹に応へあり
薄紅葉弱気は子等に見せるまじ
生き合ひて七十階の小春日和
夜の窓霧雨包むナポリ湾
朝寒やヴァチカンに入る列の中
フイレンツエの我が月影の石畳
ベネチヤの鐘楼高し弓張月
ダビデの像頭上はるかに望の月
一人寝に残る虫聞く静寂かな
生涯の途中黒豆二人摘む

さいたま 神田 惣介

我孫子 石井 久子